

黙示録の記録

第2章

しみやしわやそのようなもの

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

序章 未来をひもとく書

第1章 栄光のうちにある人

第2章 しみやしわやそのようなもの

第3章 誘惑の時

第4章 御座の周り

第2章 しみやしわやそのようなもの

七つの教会に対する七つのメッセージ

黙示録

キリストが、初めてご自身の教会を建てる約束をされた時、キリストは黄泉の力もそれには打ち勝てない「マタイによる福音書16章18節」と約束されました。キリストが死から甦よみがえられた時、キリスト御自身が死と黄泉（ハデス）とのかぎ黙示録1章18節を持っていました。黄泉の門は開かれたままです。信仰をもって死んだ囚われ人たちは、キリストと共にパラダイスに昇るように解放された。キリストはなおかぎを持ち続けており、黄泉の出入り口は、キリストの教会のメンバーとして信仰をもって死んだ人々に対して、再び閉じられることは決してありません。彼らが肉体から離れるとき、彼らはすぐに主とともにいるのです（「IIコリント人への手紙5章8節」）。

肉体にとどまっている間は、キリストの教会の一員であるこれらの人々は、まだ決して完全にされていません。しかし、彼らは聖霊によってキリストのからだとされていて「エペソ人への手紙12章13節」、黄泉の門の向こう側におり、もはや黄泉に閉じ込められることはありません。」「キリストは教会のかしらであって、……キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた……キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何ひとつない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです」[「エペソ人への手紙5章23節、25〜27節」とある通りです。

ある日「義人たちの霊」が「完全な者」とされます。それは、私たちみなが「天に登録されている長子たちの教会」[「ヘブル人への手紙12章23節」]に集まる時です。しかしながら、今しばらくの間、私たちはなお不完全であり、それゆえ、私たちが集まっている個々の教会は同様にしみやしわに満ちているのです。それにもかかわらず、私たちはキリストに属しており、そして、キリストは、聖霊を通して「私たちの真ん中」におられるのです[「ヨハネによる福音書16章7節」]。聖霊は、キリストの教会を慰め、導き、有罪を宣告し、訓戒し、建て上げています。

黙示録2章、3章で見る写実的描写は驚くべきものです。七つの教会へすべての教会を表わす完全数へすべては、ほとんど見込みのない教会です。外見上強く見える教会は、妥協と道徳的腐敗に満ちています。霊的に強い教会は物質的に弱いのです。すべての教会は非常に誤りに陥りやすく、迫害されており、差し迫った崩壊と離散、そしてどの教会もそう長くは生き残れない運命にあります。それでも、キリストは教会の真ん中において、聖霊は、勝ちを得る者に対する大いなる祝福の約束を彼らに語り続けているのです。

これらの七つは実在した教会であり、今日何千人もの訪問者が聖地への団体旅行で、アジアの七つの教会の廃墟を訪問しています。彼らは実在した教会で、これらの教会は代表的教会として選ばれ、なお現代の私たちの教会を象徴しています。私たちの現在の教会は、各々エペソ、スミルナ、その他すべての教会のいくつかに当てはまるのです。彼らの問題は私たちの問題であり、キリストの彼らに対する勧めは、同じ力で私たちに当てはまる問題なのです。

決してこれが最も重要な主題ではないけれど、七つの教会は、その後、何世紀もの間、キリストの教会が経てきたそれぞれの発展と変化の各段階を描写しているように思われる所に意味があります。実際に、歴史は長年にわたって、主たる発展はこのようであったことを示しており、これらの使信にあるそれぞれの勧告の結果に伴った展開は、主によってこれと同じ順序で起こるように準備されていたと取ると無理がないのです。キリストは選択に当たって気まぐれではありません。全体としてだけでなく、七つの順序には、何か重大な意味があるように結び合わされています。黙示録はそのすべてが、預言だと言われています。もしその中に教会時代に関する預言が何かあるとするならば、これらの二つの章にあるに違いないのです。さらに、七つの教会の最後の四つは、キリストの来臨までなんとか生き残っているはずで[「黙示録2章25節、3章3、11、20節を見よ、もしこれらの四つの教会が、この時代の終わりまでつづく教会発展の時期を特に表わしているとするなら、このことはただ現在も持続しているはずです。

七つのメッセージの各々は、同じ決まった形式で書かれており、さらなる事実、これらが主のメッセージのすべてを網羅するテーマであることを確認できることです。各々の手紙は、次のような七つの部分から成っています。

1. 挨拶 「……にある教会の御使いに書きおくれ」とは、前の章で示したように、「御使い」は、ただ天使

だけを指し得るので、牧師や他の人である使者を指す事はありえませんが、新約聖書にある教会宛の書簡で、かつて牧師、司教、または、教会の長老たちに宛てて書かれたものはありません。これらの書簡は、常に教会または教会の人々に対して宛てて書かれています。これらにある背景は、同じことを示しており、天使をもつて単に教会を象徴し、書簡の伝達を慎重に行なっているのです。

2. 差出人はキリストその方である。「……方が言われる」とは、各々の場合、その方は、キリストの容貌のある特徴で、キリストご自身であることがわかります。それは特定の教会に対する個々のメッセージにふさわしい容貌でした。

3. 知っているとの主張「私はあなたの行ない……を知っている」とは、キリストは教会の真ん中におられ、したがって、各々の教会のわざ、環境、態度すべてを親しく知っています。

4. 論評と勧告 各々の集会に対するメッセージの核心はここにあります。ある時は賞賛的、ある時は批判的なものが、各々の特別な状況に完全に合っているのです。常に勧告があり、キリストが彼らに望んでおられる所にみな到達しているとして、どの教会もただのんびりしている事はできません。

5. 約束された（または、脅迫する）来臨ある人に対して、キリストは信仰のない人をさばくために来ると脅迫して、他の人に対しては、死んでいる彼らを受入れるために、他の人に対しては、この時代の終わりに彼らを受け入れるために来ます。各々の場合、約束と警告があり、キリストは彼らの現在の状況を終わらせるためにひとりひとりに来るのです。

6. 用心するようにとの勧告 「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」とは、たとひ各々の教会が、その教会に当てられた特別なメッセージを持つとは言え、各教会は、キリストが御霊を通して、すべての教会に語っていることに、耳を傾け、注意することこそ極めて重要なことです。

7. 約束された祝福 「勝利を得る者に対して……」とは、信仰によって、世とその誘惑と迫害すべてに打ち勝った「イヨハネの手紙5章4、5節」各々の教会にいる忠実な人々すべてに対して、特別な祝福が約束されているのです。

熱心な教会

黙示録2章1節 エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。』

エペソは、アジア州の首都で最も大きな都市（現在トルコの南西部）で、大きな港町でした。また、非常に不道徳な町で、豊穡の神ダイアナ（アルテミス）がエペソの町を牛耳っていました。使徒パウロは、そこに教会を設立し（使徒の働き19章）、彼が開拓したどの教会よりも多くの時間をそこで過ごしたのです（使徒の働き20章31節）。聖書以外の資料によると、その後、使徒ヨハネは長年にわたりエペソで奉仕し、イエスの母マリアはそこで死んだと言われています。パウロとヨハネとの間は、テモテへの手紙がその地域にある教会を託されていたと言われています。

キリストは「御使たちよりもさらにすぐれた」（ヘブル人への手紙1章4節）方で、事実、御使いのすべてを御手にもち、各々の教会の真ん中を歩かれます。キリストがご自身のメッセージを教会の中で最も大きな最も強い教会を

通して、すべての教会に伝え始める時、ご自身の立場と力をすべての教会に気付かせるのです。最も大きい最も強い教会から、明らかに他の教会が築かれたのです〔使徒の働き19章10節〕。

黙示録2章2節 「わたしは、あなたの行ないを知っている。また、あなたが、悪い者たちを我慢することができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。

エペソのクリスチャンは、彼らの教会が、パウロによって始められた40年後も「働き、労苦、忍耐」においてなお熱心でした。けれども、彼らは初期のテサロニケの信者たちとよい対照をなしていました。彼らについて、パウロは「信仰の働き、愛の労苦、望みの忍耐」〔テサロニケ人への手紙1章3節〕を發揮していたと言っています。信仰と愛と希望の三つ〔コリント人への手紙13章13節〕は、教会に「留まる（英訳：abide）」べきです。さもないと、たといどんなに熱心であっても、教会は最後に力を失います。けれども、教会が使徒または使徒の継承者と偽って主張する人々を、実際に拒否する注意深さを持っている事は良いことで必要なのです。数えきれない人々が、このような偽りの指導者によって何世紀にも渡り、創造主から遠ざけられてきました。使徒職の継承者はいません。なぜなら、使徒職の最も重要な必要条件は、キリストを見た人でなければならぬということだった〔コリント人への手紙9章1、2節〕からです。

黙示録2章3節 あなたはよく忍耐して、私の名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。

主は、エペソの教会の熱心さと不動の信念を強調しています。すべてが主の名によってなされました。このような特徴は、一世紀の教会、すなわち使徒時代の教会で独特のものでした。その結果、福音は当時知られていたすべての世界に広まったのです〔コロサイ人への手紙1章5、6、24節〕。

黙示録2章4節 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

このことも、使徒時代後期の教会に独特でした。彼らの熱心さと忠実さはまだ強かったが、彼らの初期の暖かい愛く信者相互の、失われた人への、また、主に対するく愛は冷え始めていました。けれど、この悲しいあかしはどの時代のどの教会にも当てはめられるのです。したがって、どの教会も絶えず心をさぐり、愛を試し続ける必要があるのです。

事実、パウロが書簡を閉じるに当たって書いたのはエペソの人々に対してでした。「私たちの主イエス・キリストを朽ちぬ愛をもって愛するすべての人の上に、恵みがありますように」〔エペソ人への手紙6章24節〕と。「初めの愛」〔最高の愛〕、「最良の愛」は、偽りのない誠実な愛です。私たちは、主イエス・キリストを心から愛しているのだろうか。それとも、最初の愛を失ったのだろうか。これが、最も大切な問題なのです。

黙示録2章5節 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

実際に熱心でしつかり立っていたエペソの教会に対して、キリストのために、文字通り心を変える（悔い改める）ように呼びかける必要がありました。彼らは、最初の愛に戻らなければならぬし、最初の行為に戻らなければならぬし、霊的にも最初の高さに達しなければならぬのです。そうでなければ、御使いが取り去られ、キリストも真ん中にはもはや留まらない日が必ず来ることは避けられません。一団の人々が、自分たちを教会と呼んで、長い間エペソで集まりを続けたでしょうが、それはもはやキリストに属するものではないのです。それは、なお「燭台」ではあるが、それはキリストのおられるところから、「取りはずされる」のです。結局、エペソの町そのものも滅びることになったのです。

もちろん、エペソの教会は、キリストとすることばとキリスト信者に対する愛の冷えている他のすべての教会を表わしており、エペソの教会への警告は、今なお当て嵌まるし、生きているのです。

黙示録2章6節　しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。

キリストが憎むことができ、キリストに従う人々が憎むことをキリストが是認されるとは、意外な事ではないでしょうか。「あなたの敵を愛しなさい」〔ルカによる福音書6章27節〕と言われた方から来た不思議な矛盾です。しかし、憎むべきは、その行為であって行為者ではありません。愛である方の憎しみの対象は、実際に憎悪に満ちた行為に違いありません。そして、私たちが何かを知る事は大切で、それ、私たちがまたそ

の行為を憎む事ができるのです。それは、ニコライ派の行ないです。

もし、ニコライ派が、実際に多くの注解者が考えているように知られていなかった分派であったなら、キリストがこの靈感された書簡に奇妙な批判をなされた理由がわかりません。実際に、ニコライ派と呼ばれた後期グノーシス主義の分派がありました。しかし、これは黙示録が書かれた当時からかなり後に生じた分派です。このグノーシス主義者はヨハネの書に対するひどい敵対者となりました。そこで、おそらくヨハネの権威を受け入れる人々を、直接侮辱するものとして、ニコライ派の名を採用したと思います。

だが、ヨハネの時代のニコライ派の人々とは、誰だったのでしょうか。このような教派についての信頼できる記録はありません。しかし、ある人々は、アンテオケの改宗者ニコラオ〔使徒の働き6章5節〕という初代の執事にちなんで名づけられたグループだったのではないかと考えています。他に、このような分派や教えに関する聖書の記述はありません。

それにもかかわらず、ここでの言及は重要で文脈から理解でき、どこにでもあるすべての教会にとって適切な教訓だと考えなければなりません。エペソ人への手紙の中にあるただひとつの手がかりは、いつわって、実際に使徒であると主張した人々で、教会によってそれゆえに拒否された人々に関する前もってなされた完全に対応する言及です。

使徒パウロはこのような偽使徒について語っていました。

「こういう者たちは、偽使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に装束しているのです。しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに装束しているのです。ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとな

ります」〔Ⅱコリント人への手紙11章13～15節〕。

また、キリストも偽キリストと偽預言者に対して警告しています〔マタイによる福音書7章15節、24章5、24節〕。ヨハネ自身も「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神（創造主）からのものかどうかを、ためしなさい」〔Ⅰヨハネの手紙4章1節〕と警告しています。ヨハネは、エペソで奉仕していた時、確かにこのなすべきことをエペソの人々に教えたに違いありません。そして、彼らは実際に「使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いた」〔黙示録2章2節〕のです。また、ヨハネは、「イエスを告白しない霊はどれひとつとして神（創造主）から出たものではありません。それは反キリストの霊です。」〔Ⅰヨハネの手紙4章3節〕と警告しています。

イエス・キリストが憎まなければならぬ何らかの行為があったとするなら、それは、彼ら自身……使徒または預言者、なおキリスト御自身でさえあるかのように……何か神聖な権威を持つと主張して、人にキリストご自身のご性格と権威を否定させようとの企てにあるに違いないのです。「ニコライ派」という言葉はもともとかなりの人々のグループに当てられた名で、彼らは一世紀の教会で聖なる権威を装って確かに人々を困らせていたようです。このことば自体は、ニカオ（「打ち勝つ」——キリスト者の生活の「打ち勝つ」）に関連して黙示録2章、3章の何か所かで用いられている）とラオス（「人々」というギリシャ語に由来しています）。また、ある有名な偽使徒がニコラオスと名づけられており、また、ニコライ派の名は、こうして彼と関連づけられるようになった可能性もあります。しかし、この名が採用されたもとの理由は、おそらく「人々を征服する人々」というその意味にあつたのです。すなわち、これが少なくとも、キリストがヨハネを通して、なんら他に身分証明も説明もなしに、ニコライ派ということばを用いた理由であつたに違いありません。

こうして、ニコライ派の人々、彼らの行為をキリストは憎まれます。彼らは、ヨハネのような真の使徒や、キリスト御自身の権威をさえ奪う目的で、初代教会にやって来た人々でした。このことを成し遂げるために、創造主によって油注がれたとか、権能を持つていると主張したのです。彼らは雄弁で、説得力のある人々で、その上、偽りの奇跡をさえ行なっていたのです。ペテロは彼らを「偽教師たち」と記述しました。彼らは、「滅びをもたらす異端／自分たちを買い取つてくださった主を否定するようなこと／さえ持ち込み、「作り事のことば」や「むなししい大言壮語」を用いて、これを成功させる事ができました〔Ⅱペテロの手紙2章1、3、18節〕。こういう手段で、これらの偽使徒たち、これらの「人々を征服する者たち」は、これらの闘争中の教会にいる若いクリスチャンたちに対し、「創造主の恵みを放縱に変え」〔ユダの手紙4節〕、「肉欲と好色によって誘惑しよう」〔Ⅱペテロの手紙2章18節〕と狙っていたのです。ヨハネは、エペソの人々も含めて、ヨハネを通してキリストを受入れたこれらの改宗者に、このような詐欺師について非常に強いことばで警告しています。

「なぜお願いするかと言えば、人を惑わす者、すなわち、イエス・キリストが人として来られたことを告白しない者が大ぜい世に出て行ったからです。こういう者は、惑わす者であり、反キリストです。……あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。」〔Ⅱヨハネの手紙7節、10節〕と。エペソの人々は、パウロ、テモテへの手紙それからヨハネによって教義をよく教え込まれていました。したがって、彼らはこれらの偽りの「使徒たち」をみわけることができ、彼らの行為を「憎んだ」のであり、主はそのゆえに彼らを賞賛しました。

この危険は、初代教会に特有のものではなく、キリストは、すべての教会にニコライ主義を見守り拒否するように望んでおられます。この危険は、今日の教会にも実際に当てはまるのです。偽預言者、偽使徒、偽

の奇跡、人々の征服者、偽教師たち、彼らは、キリストが真の創造主であり人であることを否定し、道徳律超越論者「キリスト教徒は、福音書に記された創造主の恵みにより道徳律から解放されていると主張する人々」の教師たちは、よく考えれば、創造主の恵みは性的に無軌道な行為をも許すと教えます。キリストが決して意図していない権威と力が、彼ら自身にあるとする人たちは、少なくとも初代教会にあったと同様に、今日の教会でも大問題として存在します。キリストは、このような行為を憎まれるし、私たちもそうすべきです。私たちは、このようなことをする人々を憎むべきではなく、彼らの行為と教義を憎みしりぞけなければなりません。

黙示録2章7節 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神(創造主)のバラダイスにあるいのちの木の實を食べさせよう。』

聖なる原則は、創造主のみこころをなしたいと欲する者だけが創造主のみこころを知り得るのです(ヨハネによる福音書7章17節)。したがって、霊的耳を持つ者だけが御霊のことばを聞くことができます。キリストと聖霊はどちらが語られてもただひとつのメッセージであることに注意して下さい。また、エペソの教会に宛てたメッセージは、またすべての教会に宛てて、書かれたメッセージでもあったことを心を留めなければなりません。

ヨハネは時々、書簡「ヨハネの手紙2章13節」や福音書「ヨハネによる福音書16章33節」で、「打ち勝つ」(ギリシヤ語でニカオ、英語の *Nicolaïtes* 「ニコライ派」の接頭語と同じ)ということばを用いましたが、これらには、常に「悪い者」とか「世」という対象があります。しかし、これらの書簡には、キリストにあつて、すべてのものに打ち勝つものの姿があるのです。一般に「打ち勝つ」者です。これは「打ち勝つ者」に対する七つのすばらしい約束

束の最初であり、園の中央にいのちを与える木「創世記2章9節、3章22、24節」をもつ原初の創造を振り返って見えます。しかし、また同時に、新しい創造を期待をもって見ているのです。そこには、いのちの木がまた植えられています。それは一本の木だけでなく、新しいエルサレムの街路の真中に、そして、川の堤防に沿っているいのちの木がまた植えられています。アダムは、いのちの木への道を閉ざされましたが、勝利を得る者は永遠に自由にいのちの木に近づくことができます。

患難の中にある教会

ここ数十年、教会が患難期を通過するかどうかに関して、神学的論争が多くなってきました。個々の教会は、実際に、ある程度の患難を耐えなければなりません。「神(創造主)の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ」(使徒の働き14章22節)。「確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます」(IIテモテへの手紙3章12節)。スミルナの教会は、苦しみにあつている教会とその必要を例示するために主が選ばれた教会です。

黙示録2章8節 また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。』初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。

スミルナは、港町で、エペソの北約五十六キロメートルの所にあります。スミルナは今なお、トルコでイ

スミールとして生き残っています。ヨハネを通して救いにあずかったポリカールは、紀元一五五年頃に殉教するまで、そこで監督として奉仕していました。

迫害されている教会に手紙を書くに当たって、次の事実を思い起こさせるより大きな慰めはないはずです。すなわち、主はご自身創造主であり、すべてのものの世継ぎとして、彼らの真ん中におられ、すでに死に打ち勝たれました。キリストにあつて、彼らは、最終的に勝利を得ることは確かでした。

黙示録2章9節 「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。——しかしあなたは実際は富んでいる。——またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、のしられていることも知っている。

スミルナのクリスチャンは、迫害されていただけでなく、キリストに堅く立っていたので貧乏でした。それにもかかわらず、彼らは富んでいました。なぜなら、彼らは天に宝を積み「マタイによる福音書6章20節」、「まことの富」「ルカによる福音書16章11節」を持つていたからです。また、パウロは、真の「創造主のしもべ」は、「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています」「エペソ人への手紙6章10節」と書き留めていました。

他にも問題がありました。エペソの教会が使徒であると自称したが、実はそうでなかった人々に悩まされたように、スミルナの教会は、ユダヤ人と自称したがそうではなかった人々によって悩まされていました。偽使徒たちは、「サタンの手下」「エペソ人への手紙11章15節」であるように、にせユダヤ人たちは「サタンの会衆」「黙

示録2章9節、3章9節」を形づくります。ユダヤ人であり、したがって選民であるという彼らの主張そのものが冒涇だとキリストは言われます。

実際、スミルナには、ユダヤ人の大きな地域共同体がありました。そして、これらが教会と福音に強力に敵対したのです。彼らは、スミルナに滞在しているローマの官憲を説得してポリカールの死刑を執行させる役割を果たしました。記録によると、彼らはポリカールの火あぶり用の薪の山を組むための丸太を運びさえたことあります。

しかし、これらの人々は、少なくとも肉体的には真のユダヤ人でした。主は、ここでは事実にに言及している可能性があるのです。創造主の観点で、真のユダヤ人とは、創造主と霊的に正しい関係にあるユダヤ人であり、したがって、主イエス・キリストをメシヤとして受け入れた「ローマ人への手紙2章28、29節、ヨハネによる福音書8章39節、ローマ人への手紙9章6〜8節」人々です。

けれども、これは疑わしい解釈です。なぜなら、彼らが霊的にユダヤ人であるか否かにかかわらず、新約聖書はどこでも、ユダヤ人の家系から生まれた人々をユダヤ人と呼び続けているからです。あざける者にはあざけらせておけばよい。スミルナのユダヤ人居留地の人々が、自分たちをユダヤ人と呼ぶのは驚くには及びません。なぜなら、みなが同じように呼んでいたからです。

ありそうな事は、この引用は霊的にユダヤ人と主張しているグループを表わしていますが、彼らは、肉体的にも霊的にもユダヤ人ではなかったのです。教会は、ほとんど始めから、ユダヤの会堂での交わりや死ぬまで続くしきたりから離れたくないユダヤ人改宗者の重荷を彼ら自身、負わされており、そこで、割礼やその他の旧約聖書の儀式や民族的宗教儀式を教会で、ユダヤ人だけでなく異邦人にも負わせようとした「使

徒の働き15章2節、ガラテヤ人への手紙2章14節、コロサイ人への手紙2章16節」。これらの「ユダヤ化論者」は、多くの異邦人に影響を与え、まもなく、これらの多くの異邦人は、キリスト教に改宗することは、結局、ユダヤ主義に改宗することを意味し、ユダヤ主義にいくらかの修正がなされてユダヤ主義が教会に長くどどまるべきだと信じるようになりました。やがて、これは行為による救いという怪物的体系に導びき、恵みによる救いと、信仰による義認という教義はほぼ完全に姿を消すこととなります。エペソにいた、偽りの教師の団が、使徒職の継承を望んだように、スミルナでは、他のグループが祭司職を継承しようと望んだのです。最後には、二つの立場が巨大な世界的体系に合併され、想像上の使徒職の継承と、念入りな目に見える祭司職で、両者は二コライ派のように、俗人を征服し、形式主義の束縛下に、儀礼厳守の聖餐式、犠牲や告解などの下に俗人を置いたのです。この体系は、スミルナにある教会のようなくつかの教会の派閥の中で、その萌芽的発達を経験しつつあったのです。ここでは、ユダヤ民族の大集団による外部からの重苦しい圧力があって、このような妥協を助長したのです。

黙示録2章10節 あなたがたの受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなた方のある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間、苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

たとえ、投獄や殉教の死を含めた苦しみが、スミルナの多くの教会の運命であったとしても、他の数え切れない教会と同様に何世紀にもわたって、キリストからの恵み深いことばは、「恐れてはいけません」でした。

死でさえも、キリストにある創造主の愛から、私たちを引き離すことはできない【ローマ人への手紙8章38、39節】のです。殉教者に約束された「いのちの冠」【ヤコブの手紙1章12節も参照】は、この地上の生涯で耐えるように召されている試練よりはるかに価値があります。

「十日の間」の苦しみは、いろいろな解釈されています。ある学者は、スミルナの教会にやって来つつある特別な十年間の迫害を意味していると取っています。恐らく、ポリカールの焚刑（火あぶりの刑）でクライマックスに達しました。ポリカールは彼らの牧師でした。しかし、もしそうなら、キリストはなぜ十年と言われなかったのでしょうか。さらに、どうしてこのことを他のすべての教会に当てはめることができるのでしょうか。

多くの人は、スミルナは、特に二〜三世紀の大ローマ帝国が教会を迫害した期間を表わしていると推測して、迫害の十の波を数え上げようとしてきました。最後の波は、コンスタンティヌス帝の回心直前のディオクレティアヌス帝の下で起こったとします。しかし、このようなリストはこじつけであり、どんなに好意的にみても、気まぐれなものにすぎません。もし、これがキリストが意味した事であったのなら、なぜキリストは率直にこの状況を預言されなかったのでしょうか。

この節の目的は、明らかに来る激しい苦難に対して教会に準備させるため、なお、彼らの苦難の時は、その後に来る永遠の栄光に満ちた時代と比べて、実際は非常に短かくつかの間にすぎないことを保証するためです。パウロが「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである」【エペソ人への手紙4章17節・協会訳】と言っている通りです。

もし、「十日間」を、その利益に比べて苦しみの短さを比較するために描かれた象徴的表現とみなすならば、

「七日間」または、もっと少ない他の日数ではなく、「十日間」と言われている理由が他にあるのでしょうか。最も似た平行箇所は、当然の成り行きとして、黙示録と非常に近い関係にあるダニエル書に見られるのです。それは、まさに、ダニエルの使命の始まりで（ちようど、スミルナの教会が教会時代の始まりで、黙示録の始めであるように）、ダニエルと三人の友たちは、「十日間」ただ、野菜と水だけの食事を受けるように申し出ました。それは他の人々には犠牲と権利の剥奪〔ダニエル書1章12、14、15節〕と思われたかも知れません。けれども、それは彼らの健康をそこなう代わりに、この十日間の「証明」と「テスト」〔ダニエル書1章14節〕は、最も健康によいさまざまな結果を齎もたらしました。「王が彼らにさまざまなことを尋ねてみると、彼らは知恵と理解において、全国の博士、呪法師にまさること十倍であった。」〔ダニエル書1章20節〕。十日間のテストは、ダニエルの場合、それ以後の七十年以上にわたる創造主への奉仕を、またとない有効なものとしたのです。

ちようど同じように、キリストは、スミルナにいるクリスチャンに、そして、他の苦しみにあっている教会にいるクリスチャンに、保障しています。もし「死に至るまで忠実であろう」との決意をもって、その十日間の短いテストに耐えるなら、イエスさまが来られる時、十倍以上に当たる生命の冠と栄光を受けることとなります。さらに、「殉教者の血は、教会の根源であり」、不当な迫害に耐える忍耐は、常に教会の最も有力な伝道の手段の一つだったのです。

黙示録2章11節 耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者は、第二の死によって滅ばくされることはない。〔口語訳〕

キリストが、「教会の御使いに」と言っておられることは、「御霊が諸教会に言われること」と同じです。栄化された主は、メッセージを与え、ヨハネはそのメッセージを書いています。天使はそのメッセージの到達を見守り、そのメッセージの到着を確認します。それから、御霊は、聞く耳を持ち、心を開いた人にメッセージを伝えるのです。

そして、恐怖に打ち勝つ者たちに対する驚くべき約束、すなわち、キリストのための彼らの働きで、死に至るまでしっかりと留まる人々に対する約束は、この世の死は、さらに素晴らしい世界への生命の入り口であり、決して第二の死に直面しないということです。しかしながら、キリストなしに死ぬ人々は、もう一度死ぬことになる〔黙示録20章12、14節〕のです。

潜入された教会

エペソの教会は初めの愛から離れてしまい、スミルナの教会は、内外からの攻撃に苦しんでいました。偽教師たちは彼らの教義をくつがえし、支配しようとしてあらゆる努力をしたにもかかわらず、両方の教会は共に健全な教義を保ち実践していました。しかし、ペルガモについての話は異なっていたのです。ペルガモの教会には良い点がたくさんあったにもかかわらず、悪い影響の足掛かりが実際にあったので、彼らは、強く非難される必要があったのです。

黙示録2章12節 ペルガモにある教会の御使いにこう書きおくりなさい。『鋭いもろ刃のつるぎを持ってい

る方が、次のように言われる。【口語訳】

ペルガモはアジア地方の中心で、スミルナの北約九十六キロメートルの所にありました。そこは宗教の中心地で、皇帝崇拜と共にギリシャの異教的宗教儀式が全盛期を迎えていました。ゼウス神殿の巨大な祭壇・世界で最も大きな祭壇で、世界の七不思議の一つがそこにあったのです。また、ペルガモは学問の中心地であり、二十万冊にも及ぶ蔵書を持つ図書館があり、……parchment（羊皮紙）という英語は、ここペルガモに由来しています。……また同時に、医学の中心で、薬の神を持ち、アエスクラピウス（ローマの医神）が礼拝され、そこから「scalpel（解剖用メス）」ということばが出たのです。通常、杖の先にとぐろを巻いた蛇がそのしるしでした【参照：民数記21章8～9節】。

ニコライ派とバラムの教えという二つの異端が、ペルガモの教会に深く潜入していました。それで、キリストは、彼の口から出る両刃の剣を持って、これら異端の教えを切り取るために、彼らのところに行かなければならないと強調したのです。

黙示録2章13節 わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの座がある。あなたは、わたしの名を堅く保ちつづけ、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住んでいるあなたがたの所で殺された時でさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。【口語訳】

主イエスは、ペルガモの人々を賞賛しています。なぜなら、彼らはひどく耐え難い状況や、妥協に対する多

くの誘惑のもとで真の信仰を保持し、キリストの御名を堅く保ってそれを宣べ伝えていたからです。一人の教会員は死に至るまで忠実にあかししていました（「あかし」と「殉教」ということばは同じです）。アンテパスという人は、聖書のどこにも述べられていません。彼は、確かにペルガモでの本当の殉教者であったのは確かだけれど、彼の名前が「すべてに逆らう者」を意味し得る事実は、たとえ死という代価を払ってでも、すべての反対者に逆らってキリストの名を心から信じる立場に立つのをいとわないすべての信者を表わしています。

サタンの座（文字通りには「王座」）は、ペルガモのゼウスの巨大な神殿に対して通常用いられた表現であったのかも知れません。その神殿は、平原の上にはぼ二百四十四メートルも高くそびえた祭壇をもつ高い丘の上に据えられていました。しかしながら、それは、おそらく、当時ペルガモが、世界中の異教宗教の最大を中心に据えていた事実について言及しています。事実、アレクサンダー・ヒスロプは、彼の名著『二つのバビロン』という本で、ベルシャザルの時代にバビロンが滅んだ時、ペルガモが古代バビロンの宗教的權威のしるしを受け継いだことを示す多くの証拠を挙げています。ニムロデの時代からバビロンに集約された古代神秘主義宗教の秘義を守って来た祭司たちは、当時、強制的に移住させられたのです。サタンの宗教組織の本部となっていたバビロンから北西にあるペルガモへと移動して、こうして、ペルガモは、数世紀にもわたり進化的汎神論的異教主義の巨大な中心地となり続けたのです。さらに、後にそれはローマに移った。もし、ヒスロプの分析が正しいとすれば、「サタンの座」というのは、ペルガモを中心とした目に見えない主権と権力の文字通りの描写となるのです。

黙示録2章14節　しかし、あなたは少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。

ペルガモの教会は、エペソやスミルナの教会のように、偽教師たちを閉め出さなかった。たとえ彼らは、偽教師たちの教えを受け入れなかったとはいえ、彼らが教会にいる事を許し、そのパン種（動き）は発酵し始めていました。

バラムの意味（ヘブル語の意味は「その民に属さない」）は、ニコライ派の意味（ギリシャ語の意味は「人々を征服する」）に似ています。バラムの教義（彼らもまたニコライ派のように偽預言者であった）は、世との妥協に彼らをいざなうことによつて、創造主を信じる人々を制御する事でした、特に性的な罪〔民31章15、16節、ユタ11節、IIペテロの手紙2章15節〕にいざない、いつわりの神々を礼拝している人々と行動を共にする事によつてであった。この妥協的精神が、ペルガモの教会時代以来、確かにキリスト教会における最も大きな罪の一つとなったのです。

黙示録2章15節　それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。

エペソの教会はニコライ派に出会ったが、彼らを許容しませんでした（これらの偽使徒たちの本質と教義については、黙示録2章6節の解説を参照）。ここでの相違点は二つあったのです。〔1〕ペルガモの教会は、教

会員になることと、彼らの異端を布教し始めることをニコライ派に許していた。〔2〕エペソでと同様に、ペルガモでは彼らの単なる行為よりも、ニコライ派の教義（または「教え」）が、問題であった。キリストは、もちろん彼らの「行為」も教義をも憎むことを明らかにしているのです。

黙示録2章16節　だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。

彼らの集会で、バラムとニコライ派を心に抱き耳を傾ける罪のために、キリストはペルガモの教会に悔い改めるよう命じなければなりません。彼らの考えは妥協という態度から、教義と道徳的純潔を強要する態度に変えられなければなりません。（つまり「悔い改め」という意味）。そうでないと、彼らは将来のある日、諸国の民を打つための同じみことばの剣によつて、やがて来る恐ろしいさばきに直面するのです。〔黙示録19章15節〕

黙示録2章17節　耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。

ペルガモにいる勝利を得るものへの約束は、実にすばらしく比べようのないものです。「隠れたマナ」は、契約の箱の中に隠されていたマナ〔出エジプト記16章33節、ヘブル人への手紙9章4節〕を指しており、創造主がどのように

ご自分の民を荒野で養われたかを、後の世代の人々に思い起こさせるものでした。主イエスはすでに、隠されたマナとはご自身を指すことを明らかにしておられました。「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です」〔ヨハネによる福音書6章51節〕と。「白い石」も、荒野での経験に関連しています。祭司長の胸当てに、十二の異なる寶石が織り込まれていました。各々の石に十二部族の一つの名が刻み込まれていたのです〔出エジプト記28章15〜21節〕。しかし、これらの石のどれも白くはなかったのです。白い石は、おそらくきらめくダイヤモンドで、おそらくウリム（「光」）に一致し、アロンの胸当てにつけていたと思われるます〔レビ記8章8節〕。とにかく、大祭司が主の臨在の場である聖所へ入るとき、これらすべてを身に着けていたのです。それから、彼だけが隠れたマナが入っている契約の箱に近づくことができました。

勝利を得る人々……特に、ペルガモのように宗教的妥協の環境にあつて、創造主の真理に対する揺るぎない信仰を持つ人々……に対するこの約束は、創造主の御臨在に確実に近づけることと、すべての必要に対し信頼してよい準備があることに關する約束です。けれども、最も尊い約束は、主がこのように忠実な一人一人にご自身が選んだ新しい名前を与えることであり、ただ名を付けた者と付けられた者にしかわからない、特別な伝達と交わりの名であり、この世界と、来るべき世において主に仕える私たちの奉仕を反映している名です。私たちに今つけられている名前は、両親により選ばれた名で、適切であるかも知れないし、そうでないかもしれません。聖書では、名前は名づけられたその人の性格と召しに一致して（特に新しい名は、アブラハム、イスラエルなど）選ばれたのです。私たちすべてがキリストのさばきの座の前に出る時、これらの勝利を得る者は、彼らの天にある勅定書に「金、銀、宝石」〔コリント人への手紙3章12節〕をためており、「主を

恐れる者、およびその名を心に留めている者」〔マラキ書3章16・17節口語訳〕のために主はかの日に、「宝をつみあげている」のです。それゆえ、純粹な白い寶石に刻まれている新しいかの名は、永遠にキリストの名にあつて我らに伝えられ着せられます。

姦淫の教会

テアテラにある教会への手紙は、七つの手紙の真ん中にあり、最も長いものです。この教会には褒めることがたくさんありました。しかし、非難されるべきより深刻で目にあまる罪がありました。テアテラはペルガモの東、約六十キロの所に位置し、おそらく、政治的に言えば、七つの都市のうちで最も重要性の低い都市でした。テアテラの最も重要なことは、多くの商業ギルド（同業組合）をもつ商業のセンターとしてでありました。パウロの導きで改心したルデヤは、テアテラ市の「紫布の商人」〔使徒の働き16章14節〕で、この教会形を援助したと思われる。

黙示録2章18節 また、テアテラにある教会の御使いに書き送れ。『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神（創造主）の子が言われる。』

テアテラへの挨拶は、イエス・キリストが創造主の御子と、黙示録で呼ばれているただ一つの箇所で、語り手が創造主の御子であると確認できます。キリストは、初めに「人の子のような方」〔黙示録1章13節〕として

記されていきました。その容貌は恐ろしいものでした。その目は、「人の思いと心を探る」〔黙示録2章23節〕燃える炎のような目をもち、その足は、土の器を砕くように〔黙示録2章27節〕光り輝くしんちゅうのような踏みつける足を持つ、実に聖なる怒りに満ちた容貌をしていました。

黙示録2章19節 「わたしは、あなたの行ないとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近頃の行ないが初めの行ないにまさっていることも知っている。

初めの愛から離れ、初めの行ないを止めてしまった〔黙示録2章4、5節〕エペソの教会とは異なり、テアテラの後の行ないが、初めの行ないより、より一層強い印象を与えています。「愛と信仰と奉仕と忍耐と良い行ない」を多く示していて、いつもこれらが増し加えられている教会は、ほとんど理想の教会であると思われることでしょう。もしかすると、テアテラのルデヤ〔使徒の働き16章13、15節、40節〕は、教会とその会衆に長続きのする良い特質を残したのかもしれませんが。しかし、このような特質は、どんなに重要であっても、健全な教義と敬虔な生活に置き換えることは出来ないで、急速にテアテラから失われて行ったのです。

黙示録2章20節 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。

エペソの教会は使徒と自称する偽者たちに騙されることはありませんでしたが、テアテラの教会は、教える導く地位を、預言者と自称する不品行な女に実際に任せていたのです。パウロは、明確に、女性が教会で語ったり（1コリント人への手紙14章34節、特に異言や預言などの超自然的と思われる賜物の使用に言及して）または、このように男の上に権威を振るうような方法で教える事〔1テモテへの手紙2章11、12節〕を禁じており、これらの指示を無視し続けたことは、テアテラを悲惨な状況に導いてしまっていたのです。

イゼベルという名は、この偽女預言者の実際の名前は想定上の名前であったか、または、単にキリストが彼女に与えた写実的な呼称であったかのいずれかです。いずれにせよ、古代のイゼベルとの霊的類似は、明らかに認められます。あのイゼベルは、エリヤの時代にイスラエルを「姦淫と呪術」に〔Ⅱ列王記9章22節〕、大きく変換させた原因でした。同時に、バアルへの偶像崇拜〔Ⅰ列王記16章30、33節〕に向かわせた原因でもありました。このイゼベルは、魂の霊性を高めるとみせかけて、生活で肉欲にふけることを奨励し、確かに、「愛」を強調し続け、他方、教会の多くが今日しているように「健全な教義」と「世からの分離」という大切なことをなしくずしにし、それを彼女が超自然的啓示によって受けたと主張して、この教えを正当化し続けたのです。彼女は、認可された国の制度（宗教的売春と神殿内での友人たちとの飲めや歌えの饗宴を含めた）に参加するのを拒むことによって、周囲の人々と不必要な対立をつくりだす必要はないと彼らを説き伏せたのです。なぜなら、救いはただであり、重要なのは愛と信仰と良い行ないなのだからと。教会の中で彼女の教えにまだに従っていない者たちでさえ「イゼベルという女をなすがままにさせている」ことで罪とされたのです。

黙示録2章21節 わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしない。

テアテラの「女預言者」については、何一つ述べられていませんが、実際に彼女の罪の重要な性質に気付かされてきました。すなわち、その罪は単に誤って導びかれた婦人の例というだけではなく、誠実な婦人も誤りに導いたのでした。誠実な婦人は、彼女が聖なる靈感を受け、創造主の啓示を教会と分かち合っていると考えたのです。むしろ、彼女は、自分自身の過ちを知っていました。造り主のことは故意に拒み、心の方向を変えることを拒絶したのです。明らかに、教会で彼女の追従者になった人たちにとっても、これが真実でした。ただ一つの救済策はさばきでした。

黙示録2章22節 見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。

テアテラの商工業組合の異教的儀式は、偶像崇拜と共に不品行な饗宴を伴い、そこには神殿の「女預言者」や「巫女」の保護のもとに神殿娼婦の集団がいました。イゼベルは、テアテラの教会を、外見上この体系を真似た偽にせキリスト教に導いてしまっていたのです。おそらく表向きはキリスト教への回心者をより容易に増し加えるための手段としてであったでしょう。しかし、このことは単に肉体的な姦淫にとどまらず、宗教的な姦淫であり、教会の真の頭なるキリストが、もはやこれ以上耐えられるはずのないものでした。それは、同じように邪悪で詭弁的議論が何世紀にもわたって何らかのやり方で、多くの教会やキリスト教運動でキリストの名において実践されてきていて、こんにちの教会でもなおしばしば不意に現われてきているのは注目

すべきことです。

けれども、イゼベルやその弟子たちが罪を犯した寢床は、乱痴気騒ぎの気ままな寢床になるのではなく、大患難の寢床となるでしょう。同じことばを、ずっと以前にオリブ山でキリストが用いられました。「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないようなひどい苦難があるからです」【マタイによる福音書24章21節】。同じことばが黙示録でも、やがて来る大勢のクリスチャン殉教者が殺される時の記述に用いられています。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです」【黙示録7章14節】。この「大患難」については、後で十分に検討するとして、このテアテラの教会やテアテラに似た教会（より正確に言うと、そのような教会にいる人々で、彼らは結果的に、偽にせの女預言者や預言者—ニコライ派やバラムの教えの追従者で、彼らは教会の人々をだまして、キリストと主のことばの真理を否定するように導いた）が、実際に、大患難を経験するのは注目すべきことです。（教会時代の終わりにおける多くの姦淫の教会にとって真実であるように）彼らが、来る大患難時代を通過するか、または、他の時期に他の方法で大患難を経験することになるかのいずれかになります。

黙示録2章23節 また、わたしは、この女の子どもたちをも死病によって殺す。こうして全教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知るようになる。また、わたしは、あなたがたの行ないにに応じてひとりひとりに報いよう。

イゼベルの子どもたちは、たぶん、実際の乱交によって生まれた非合法な子どもたちを含めていましたが、

このことばは、より明確に彼女の教えに改宗した人にも言及しています。テモテへの手紙が「信仰による」パウロの「子」〔「テモテへの手紙1章2節」であつたように、イゼベルは偽にせキリスト者という快樂主義者の烙印を持つ多くの者を獲得しました。そして、彼らは彼女と共に来るべき患難を通過するのです。「死病によって殺す」は、死刑執行による完全な死を意味している慣用句です。

主イエス・キリストは、人の心と隠された思いをさぐり理解します。主は、「悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです」〔「マタイによる福音書15章19節」と言われました。テアテラだけでなくすべての教会は、悔い改めないときに、キリストがそのような行動を適切にさばかれることを知らなければなりません。

黙示録2章24節　しかし、テアテラにいる人たちの中で、この教えを受け入れておらず、彼らの言うサタンの深いところをまだ知っていないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。

この手紙は、実際には、テアテラの残された忠実な人々にあてられています。イゼベルと彼女に従う者たちは「彼ら」であつて、「あなたがた」ではありません。彼らが教会を牛耳つていても、キリストが教会を吟味する時、彼らは本当は教会に属するものでないことが明らかになるのです。そして彼らは速やかに近づいている大患難の時に滅ぼされる運命にあるのです。ここで、主は、教会にいるこれらの人に、残りの奨励のことばを与えています。彼らは、主のことばに忠実であり、他の方法で主のみこころを実に素晴らしく行なっていたのです〔黙示録2章19節〕。

サタンの深み（深み〔英訳 deep things〕）（英訳 the depth of Satan）は、創造主の深み（英訳 the deep things of God）〔「エリント人への手紙2章10節」とよい対照をなしているかも知れません。ニコライ派の教えはエペソでは拒絶され、ペルガモでは大目に見られ、テアテラでは大手をふって歩きまわっていました。教会を取り巻く異教の秘儀宗教の人々は、創造主に対する大いなるサタンの陰謀の最も奥深い秘義の数々の中で彼ら自身の「熟達した点（英語 ADepsis）」を教えてきたし、同じようなことが、さまざまな世界のオカルト宗教で実際になされてきたし、今もなされているのです。サタンは、真の教会すべてにとって憎い敵で、教会をいくらかでも墮落させることができれば、その時は、いつでも勝利を得ることになります。しかし、サタンが最も満足する勝利は、サタン自身の「秘義（英語 deep things）」を創造主の深いところの代わりに教会に導入するときです。このことを彼はテアテラで余りにも見事に成功させたので、信心深い残された者たちは、それと戦うすべをもたなかったのです。キリストご自身がそれをぬぐいさらなければならぬので、その間、真の教会はただキリストを待たなければならぬのです。

黙示録2章25節　ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。

これは七つの手紙で、キリストの再臨に関する最初の明白な言及です。たとえ当時彼らが知っていた限りにおいては、テアテラに実在していた教会は、キリストが再臨される時、存在していないとしても、何世紀にもわたって、すべての教会にとって真実であるように、彼らは確かに主を見つづけているように期待されていたのです。キリストの勧告は、テアテラと同様の問題を抱えているすべての教会に直接当てはめること

ができるのです。そして（アルファでありオメガである）キリストは、すべての教会を知っているので、実際に主が最後に戻ってくる時に、いくつかのテアテラのような教会がこの世で活躍していることをあらかじめ知っておられました。確かに、このような教会がこんなにたくさんあります。

黙示録2章26節 勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。

キリストの再臨についての記述のすぐ後に、主の再臨の後に来る千年王国についての記述が来ます。他の教会にいる信者のように、テアテラにいるこれらの「勝利を得る」信者たちは、千年王国に先立つ獣の支配下に殺される（黙示録20章4節）将来の信者と共に、諸民族をキリストとともに支配します。

黙示録2章27節 彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。

この教会あての手紙の前置きで、キリストが創造主の御子であるとの黙示録で唯一の身元保証があります。けれども、キリストの父として創造主を紹介しているところが三か所あります（黙示録2章27節、3章5、21節）。ここでの用語は、明らかに詩篇2篇7〜9節から来ています。しかも、特別な約束が創造主の御子に対してあります。御子と同じ約束を御子に忠実なしもべたちと共有します。「聖徒が世界をさばくようになる」（エコーリント

人への手紙6章2節、ダニエル書7章18、27節も参照）のです。実際に行なわれるはずの「支配」は、実際には羊飼いや牧師のように「世話をする」または「養い育てる」ことです。彼が支配に用いる「杖」（英訳 rod）は、ヘブル人への手紙1章8節の「杖」（英訳 sceptre（王権））と同じことばです。

黙示録2章28節 また、彼に明けの明星を与えよう。

イエス・キリストご自身は「輝く明けの明星」（黙示録22章16節）です。それゆえ、この約束は主ご自身の臨在が、主に従う人々に対する賜物であることを保証しています。おそらく、それは、主の再臨に対し再び言及して、再臨の最初の場面です。そのときキリストは、主を信じる者たちをご自身の面前に引き上げるために来られるのです（「テサロニケ人への手紙4章16、17節」）。

黙示録2章29節 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。

この型通りの勧告は、今までは勝利を得る者たちへの約束の前に書かれています。けれども、最後の四つの書簡では、この勧告は勝利を得る者に対する約束の後に来て、手紙をしめくくっています。この変更には明らかな理由はありませんが、これらの四つの書簡の各々が、差し迫ったキリストの再臨に関する勧告を含んでいるのも事実です。こういうわけで、それらの四つの教会は、キリストが再臨されるとき、活躍している四つのタイプの教会を表わしているように思われます。おそらく、来るべき世で約束されている祝福よりも、

第2章

準備するようにと**いう聖霊からの最後の勸告を、**さらに必要とする状態にあるのです。